昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年6月5日発行（毎月5日1回発行）
第51巻6月号（通巻623号）

風土

6

雀の子

神蔵器

嵯峨天皇車返しの桜かな

天平の甍を辷る雀の子

たましひのあそぶ御衣黄桜かな

百歩より一歩が遠し風光る

これやこのよもつひらさか花吹雪く

PDF= 俳誌の salon

うち水に死もなつかしき抹茶かな

利休忌や二タめぐりして人力車

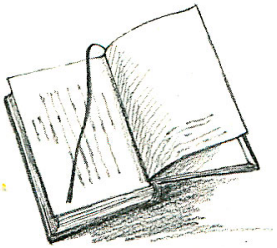
神楽坂春満月を上げにけり

雲は天才紅白きそふ八重桜

蝶の来て花かたかごの身をそらす

牡丹百耳のうしろのしんかんと

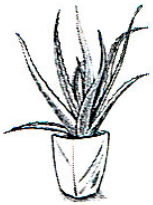
白毫やものの芽ほぐす雨となり



PDF= 俳誌の salon

竹間集

同人作品



名草の芽

浜福　惠

啓蟄やスープの冷めぬ子との間（あい）
播磨より刃物屋の来て名草の芽
青饅や鄙に名立たる岩津葱
乗込や吃水ふかく鷺立てり
まだ飛べぬ天道虫としやぼん玉
亡きひとにかかる電話や鳥雲に
鎮魂の色に咲きつぐ一花草（過ぎみちのくに思ひを馳す）

春泥

鈴木とおる

春泥を町に履き出す男子校
春泥に籾殻を撒く妻の墓
担任に卒業の日の暮れにけり
百年の隣の牡丹芽の開く
明け方に一と時盛ん春の雪
一つ荷を電車に忘れ四月馬鹿
丹沢に日の入り計る春の暮

花まつり

外川　玲子

吉野梅郷駈けのぼりたる梅の天
あの世また逢はむいのちや花まつり
石の橋（浅草伝法院）木の橋しだれざくらかな
句碑小さく声ありやなし風光る
春炬燵かかへて地震をやり過ごす
青柳の橋一つ過ぐ人力車
地震のあと三月十一日の畳拭く

PDF= 俳誌の salon

卒業

山田　暢子

巨大津浪余寒の町を裏返す
藻のごとく漂ふ町や凍返る
三月やこの世の地獄見てしまふ
朧夜の空耳海のこゑばかり
冴返る瓦礫の中を人歩き
少女たちジャージー服で卒業す
明日の空生きてまた遇ふ桜かな

花辛夷

門伝　史会

雲雀野や野菊の墓へ道一本
民芸館の床の軋める春愁ひ
春障子明かりに展示古人形
大津波阿修羅のごとく冴返る　三月十一日
ふるさとに余震のつづく朧月
春寒や袋に詰めし非常食
大地震知らぬ振りして花辛夷

「淡交」以後（三十）

野沢しの武

初鶏の一声きりや洗面す
馬齢また加へ独りの初湯殿
新しき俳句手帳に雪の句書く
老二人にてそこばくの七日粥
度肝抜く漁網置場の大氷柱
詫びて済むことにもあらず雪つのる
屋根も木もどかと雪載せ小正月

初音

鈴木　石花

野焼き追ふ写真倶楽部の漢どち
奇数日の朝餉常なる蜆汁
合格の受験子仏壇燈しけり
癒え兆す初音微かにチュッチュケキョ
鶯の高鳴く朝快方へ
余震なほ犬の遠吠え弥生尽
花開く医科歯科大の聖門

PDF= 俳誌の salon

花　冷

— 山田　暢子 —

総持寺やさくらの声を聴きながら

花冷えの空やむかしの石畳

花冷えの日々なり君の一周忌

花冷えや茶柱立ちしこと告げず

あと十年生きると決めぬ朝ざくら

花冷えを断ちて心療内科室

余花残花淋しきものに女の手

花筏冥き世までも込み合つて

車椅子の夫とさくらに囲まるる

さくら咲くまた生きること励まされ

PDF= 俳誌の salon

山河集

同人作品

神蔵器選

見はるかす関東平野春霞　根岸　善行
ゆりかへす光となりて蜘蛛の糸
食卓に地震と卵冴返る
風にまだ重たさ残る犬ふぐり
霜晴や持上げられて土乾く

夜桜や黄泉戸喫(よもつへぐい)の遠からず　天野みゆき
郁子咲ける碓氷峠のお辞儀石
牡丹に男の佇つは豊かなり
邂合も別れもさくらさくらかな
ふところに松山鏡亀啼ける

啓蟄やスカイツリーに心柱　上村　葉子
低き山背負ふ下総野火走る
ダイヤモンドダストのごとく春の雪
サーファーの背に三月の浪を待つ
コサージュの手作り二百卒業す

密に立つ女竹のさやぎ涅槃西風　生田恵美子
振り向けば障子の穴の春みぞれ
尼寺の破調の雪解しづくかな
風渡る四方の春田の交差点
一族に理系の出でて蜷蛛の紐

傍観の諦観となり三月尽　山本　浪子
かく脆きエネルギー革命亀の鳴く
春灯に集ふ贅沢余震なほ
余震なほ簞笥の底の花衣
風光るコバルト色の潮の帯

PDF= 俳誌の salon

◇特別作品抄◇

田舎暮し

森下　岩男

沖へ漕ぐ水尾の末広初日射す
ポポと咲くほとけ姿の冬蕨
早春譜ゆつくりと起つ孕み牛
寒明けの牛舎に充ちる産気かな
堰板をいろはに落とし田水張る
青き踏む白球を追ふ万歩計
尺蠖りの一歩は未知の国探し
光なき子に添ひ茅の輪くぐりけり
ダンデイな父の御下り風通す
蜾蠃追ひ田舎暮しとなりにけり

PDF= 俳誌の salon

風土独語／神蔵　器

食卓に地震と卵冴返る　　根岸　善行

この句はこのたびの東日本の大震災、またその後の度重なる余震については何も言ってはいない。従って今次の震災と限定することはないかも知れないが、今日の句であれば、その発想がこのたびの大震災にあったことはたしかであろう。

しかし、いい句は作者名が無くてもいい句である。掲出句でいえば、昔から「累卵の危」などとこわれやすいものの代表的な卵、しかも、食卓の上に不安定な状態で置かれている。そこへ地震である。作者が不意におそわれたショック、危機感は大変なものがあったろう。

くどいようだが、この句を名句にしているのは〝卵〟である。卵の危機感が作者を超えて誰とでも共有共感されるからだ。そして、季語の「冴返る」はよく句の本意に合っている。

霾やタクラマカンの砂も降る　　上辻　蒼人

タクラマカンは中国、新疆ウイグル自治区南部、タリム盆地の大部分を占める砂漠である。私たちは黄沙で親しみ、中国北部のモンゴル地方などを想定してタクラマカンまでは思い至らなかった。決して奇異や特殊なものを求めるわけではないが、黄沙の中にもタクラマカンの砂があるなどとは愉快である。また一つ世界が近くなった感じである。

牡丹に男の佇つは豊かなり　　天野みゆき

この句を読んだ時、すぐに森澄雄の

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに　　澄雄

を思い出していた。かつて私は「折々の秀句」の中で、この句の「湯のやうに」について、作者の陶酔と思っていると書いた。「ただゆったりと自然に委せて牡丹も作者も駘蕩とゆれている、「虚にいて実を行う」、その「虚」が「湯のやうに」であり、同時にその「実」が「湯のやうに」である」と。

さて、掲出句の「男の佇つは豊かなり」はどう受け取ったらよいのであろうか。

そもそも牡丹は百花の王、豪華であり、豊麗である。農家の庭の片隅に咲いたたった一輪の花でも、充分に人々を魅了し、感動させ引きつけるものをもっている。従って、この季語には積極的に対象に食い込んで行ったほうが良いのではないか、例えば、

白牡丹といふといへども紅ほのか　　虚子

牡丹の花に暈ある如くなり　　たかし

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに　　澄雄

というように。

私は掲出句の「男の佇つ」が気になった。むしろ邪魔になった。しかし、一晩寝たあと、自分の鑑賞の浅かったことに気が付いた。

PDF= 俳誌の salon

つまり作者はあくまで牡丹しか詠ってはいないのだ。この男は牡丹を見て、その美しさに感動し陶酔しているようだが、牡丹の添景物ではない。男は男として、作者と同じ感動、心の豊かさを持って牡丹を眺め、涼やかに佇っている。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

風土集

神蔵 器選

空焦す春一番の吹返し　上尾　根岸 善行
腰伸びるまでの二三歩春浅し
ゆりかへしゆりかへし虫穴を出づ
卒業といふ一輪を胸に挿す
上り下る路面電車や陽炎へる

虚子門藤岡玉骨邸（重文）
玉骨の一机一硯梅ふふむ　五條　上辻 蒼人
雑木山みな総立ちて斑雪
薄氷に来てをり鳥の弾む声
催花雨や山畑濡らし里濡らす
霾やタクラマカンの砂も降る

若布（め）刈舟一直線に滑りゆく　横浜　安永 圭子
初蝶の過ぐる一瞬庭あかり
うぐひすの初音を夫と分かち合ふ

箱根　二句
魚籠溢る魚の名聞くも日永かな
春疾風遠見番所をさかのぼる

商ひは最中一筋柳の芽　川崎　山本 浪子
芽柳の通りを挟む画廊かな
芽柳や先々代より婿養子
地下鉄に出口の数多新社員
大いなる蛤椀を艶めかす

屋根現れて道現れて山笑ふ　横戸　森屋 慶基
佐保姫の打掛け羽織るほどの雪
梅語り少女に戻る面かな
筆揮ふごと止め撥ねの梅の枝
梅咲くやBフラットからEの音

ひらひらと蝶の伝言届きけり　東京　奥田 茶々
黄水仙の丘に風あり十字墓

PDF= 俳誌の salon